



| | | |
|--------------------------|--------------------------------|---|
| 2022.5.7 } 2022.7.4 | 移転開館三周年記念展示 つながる女流歌人 | 民子が憧れた、明治・大正時代の 女流歌人について書いた自筆原稿等を展示 |
| 2022.7.7 } 2022.9.4 | 埼玉の歌人たち —短歌への八つの想い— | 長年埼玉で活動する八人の歌人たちによる 自筆資料等の展示や作品を紹介 |
| 2022.9.7 } 2022.11.4 | 陸橋をこえて —大木実と大宮— | 大宮ゆかりの詩人・大木実の生涯と作品を紹介 するほか、大宮を舞台にした詩と、昔の大宮の 写真を展示 |
| 2022.11.10 } 2023.1.4 | うたをゆたかにするもの —民子の愛した絵の世界— | 民子が詠んだ絵画の歌を中心に、 自筆資料等を展示 |
| 2023.1.1 } 2023.1.31 | 特別展示 宮澤章二の年賀状—卯— | 大宮ゆかりの詩人・宮澤章二の 年賀状と干支「卯」の詩を展示 |
| 2023.1.7 } 2023.3.4 | 母に受けたる大きたまもの | 民子が母・カネについて詠んだ歌やエッセイの 自筆資料等を展示 |
| 2023.3.7 } 2023.5.4 | 民子の父・菅野佐介 —亡き父のマントの裾にかくまはれ— | 民子が父・佐介について詠んだ歌やエッセイの 自筆資料等を展示 |



| | | |
|------------------------|---------|---------------------|
| 2023.7.7 } 2023.9.4 | 民子の夏のうた | 民子が詠んだ夏の歌の、自筆資料等を展示 |
|------------------------|---------|---------------------|

大宮図書館 館長からのひとこと

サツキ、ツツジ、ふじ、バラ、ハナミズキ、花菖蒲、この季節は街に公園に次々と花を咲かせ、私たちを楽しませてくれます。大宮図書館移転開館四周年を迎えるこの度の記念展示では、歌人・大西民子の短歌の中から花にまつわる歌を紹介します。花は人類を昔も今も悠久の時間、魅了してきました。民子もその中のひとり。

その時代の空気、音、緑、花。そこから民子が言葉を紡いでつないで、短歌という形で凝固した作品が、ご覧いただいた皆様の中で融解、浸透していき、心に残るものがあればうれしく思います。



馬淵忠秀館長

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で遼空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2023年5月7日

さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



そらんじてみし花言葉

—大西民子、花を詠む—

2023年5月7日(日)~7月4日(火)



| No | 種別 | 内容 |
|----|-------|--|
| 1 | 自筆原稿 | 「はまなすの花も吹かふる潮風にゆれやすかるはこころなりけり」 |
| 2 | 自筆原稿 | 「妹と母の待ちみむ父の忌に菜の花あまた買ひて帰らむ」 |
| 3 | 自筆原稿 | 「そらんじてみし花言葉つぎつぎに置き忘れ来し月日と思ふ」 |
| 4 | 自筆原稿 | 「身を逼むる不文の捉思ふ夜もミモザがこぼす黄なる花びら」 |
| 5 | 自筆短冊 | 「街にて不意に逢はむ日などを恋ふのみに白木蓮の花も畢りぬ」 |
| 6 | 自筆原稿 | 「街にて不意に逢はむ日などを恋ふのみに白木蓮の花も畢りぬ」 |
| 7 | 自筆色紙 | 「いづこにも風は吹きみず花の香に乱されて醒めしまどろみのあと」 |
| 8 | 自筆原稿 | 「いづこにも風は吹きみず花の香に乱されて醒めしまどろみのあと」 |
| 9 | 自筆原稿 | 「丈長く切り来し菖蒲手向けつつ人に知られぬゆかりも過ぎぬ」 |
| 10 | 自筆原稿 | 「てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る」 |
| 11 | 自筆原稿 | 「日の暮れに連れ出づる犬の在らぬこと思ひてをれば妹の言ふ」 |
| 12 | 自筆原稿 | 「共に生きてヨークシャーにヒース見たしなどと言ひたりき死の幾日前か」 |
| 13 | 自筆短冊 | 「道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ」 |
| 14 | 自筆原稿 | 「道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ」 |
| 15 | 自筆原稿 | 「地下深く何祝ぎごとのあらむ日か花サフランの湧き出でて咲く」 |
| 16 | 自筆原稿 | 「襟もとをゆるむるやうにほぐれゆく花菖蒲見てひと日見飽かぬ」 「ゆらぎつつしづもりにつつ松の花かそかに天の中枢へ向く」 |
| 17 | 自筆原稿 | 「亡き人のたれとも知れず夢に来て菊人形のごとく立ちぬき」 |
| 18 | 民子所有品 | 花瓶 |

資料はすべて大宮図書館所蔵です

参考文献

- 『日本古典文学全集41 松尾芭蕉集』小学館 1976年
- 『朝日百科 世界の植物2 種子植物2』朝日新聞社 1979年
- 『大西民子集-現代短歌入門(自解100歌選)』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『大西民子の歌(現代歌人の世界4)』沢口芙美/著 雁書館 1992年
- 『多年草図鑑1000-永久保存版-(プラントフォトガイドシリーズ)』英国王立園芸協会/編 英国王立園芸協会日本支部/訳 日本ヴォーグ社 1997年
- 『評伝 大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年
- 『日本国語大辞典4』第2版 小学館国語辞典編集部/編 小学館 2001
- 『嵐が丘 上』エミリー・ブロンテ/著 河島弘美/訳 岩波書店 2004年
- 『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『大西民子全歌集(波濤双書)』大西民子/著 現代短歌社 2013年
- 『大西民子-歳月の贈り物-』田中あさひ/著 短歌研究社 2015年
- 『総合百科事典ポプラディア7』第3版 ポプラ社 2021年

民子と花たち

歌人・大西民子は花を愛し、花についての歌を300首以上詠んでいます。学生時代にはフリージアの「無邪気」、スイートピーの「歓喜」など、花言葉に自分の未来を託し思い馳せていました。22歳の時、自分と同じく岩手で教員をしていた大西博と結婚しますが、夫婦のすれ違いが次第に多くなり、2人は別居状態になってしまいます。民子は、ひとり過ごしていた辛い時期も、家には常に花を飾るようにしていたと書いています。

また、大宮公園の埼玉県立文化会館で働いていた民子は、施設内の万葉植物園の管理運営を任せられます。園内には、『万葉集』に登場する、萩や紫陽花、卯の花などが植えられました。学生時代に国文学を学んでいたこともあり、やりがいを感じながら仕事をしていたのだといいます。

今回展示している、1986年刊行の『大西民子集-現代短歌入門-(自解100歌選1-04)』は、民子が『まぼろしの椅子』から『風水』までの7つの歌集から100首を選び、自ら解説を書いたものです。今回はこの中から、花の歌を選びました。

1 『まぼろしの椅子』と『不文の掟』

大西民子の第1歌集『まぼろしの椅子』は、1956(昭和31)年に刊行されました。家に帰らない夫・大西博と、その帰りを待つ自身の姿を歌に詠み、300部刷った本はたちまち品切れになるなど評判を呼びます。民子は、この歌集を知人の俳人・高柳重信に送りますが、高柳は単なる告白で文学になっていないと評します。この指摘がきっかけで、民子は今後の自分の短歌について模索するようになりました。

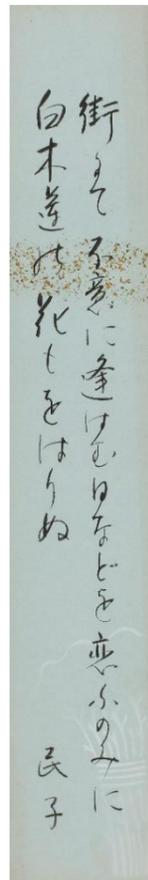
「そらんじてみし花言葉つぎつぎに置き忘れ来し月日と思ふ」(No.3)

そして、1960(昭和35)年、第2歌集『不文の掟』が刊行されます。この頃、民子は青年歌人会議に参加するなど、同世代の歌人たちとの交流から刺激を受け、これまでの作風を転換しようとしていました。民子は、『不文の掟』の中で風景や夢に自分の感情を託した歌を詠むことに挑戦します。この歌集は、日本歌人クラブ推薦歌集にも選ばれました。

「身を逼むる不文の掟思ふ夜も
ミモザがこぼす黄なる花びら」(No.4)



写真「30代の頃の民子」



自筆短冊

「街にて不意に逢はむ日などを恋ふのみに
白木蓮の花も畢りぬ」(No.5)

2 『無数の耳』『花溢れみき』『雲の地図』

夫との別居生活は、民子が30歳のころから40歳までの、約10年間にも及びました。協議離婚に至ったのは、1964(昭和39)年のことです。1966(昭和41)年に刊行された第3歌集『無数の耳』には、離婚前後の不安感を詠んだ歌が多く収められています。

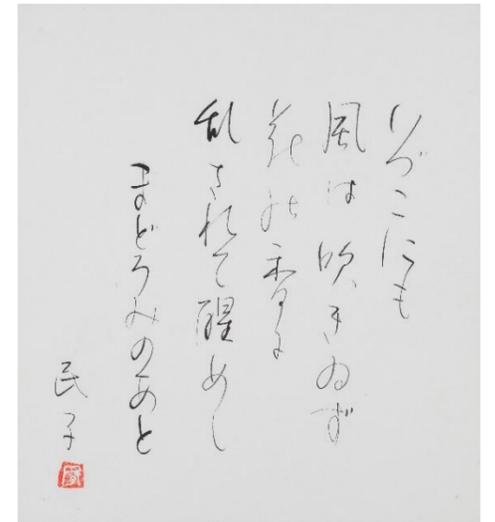
「てのひらをくぼめて待てば青空の
見えぬ傷より花こぼれ来る」(No.10)

続けて、第4歌集『花溢れみき』が1971(昭和46)年に刊行されました。このころ、民子は長年勤めた埼玉県立文化会館から、県立浦和図書館に異動となり、本に囲まれた新しい環境で働き始めました。

「いづこにも風は吹きみず花の香に
乱されて醒めしまどろみのあと」(No.7)

一方、離婚後の民子は妹・佐代子と暮らしていましたが、一番の理解者だった妹は、1972(昭和47)年に急逝してしまいます。1975(昭和50)年刊行の第5歌集『雲の地図』は、佐代子の死を悼む挽歌集ともいえます。

「共に行きてヨークシャーにヒース見たしなどと言ひたりき死の幾日前か」(No.12)



自筆色紙(No.7)

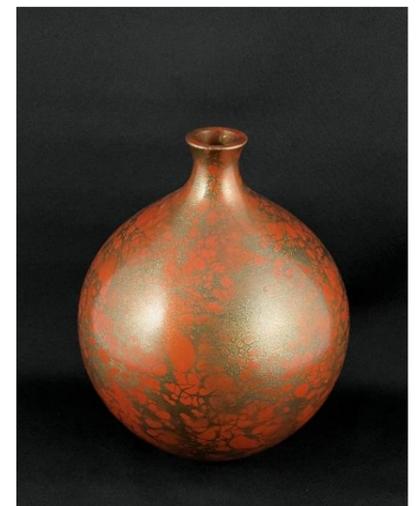
3 『野分の章』『風水』

第6歌集『野分の章』は、1978(昭和53)年に刊行されました。民子は父母、そして仲の良かった姉と妹もすでに失っており、この歌集には家族を亡く天涯孤独になった自身の心情を詠んだ歌が多く収められました。後記にて民子は、「人々はつぎつぎに発っていった。」と書いています。

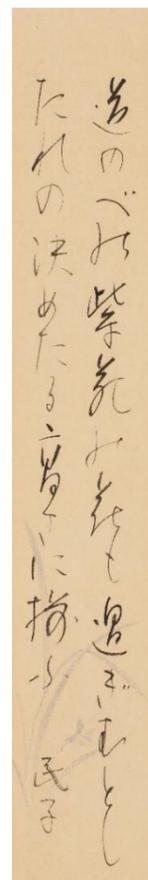
「地下深く何祝ぎごとのあらむ日か花サフランの湧き出でて咲く」(No.15)

長年の公務員生活も終盤に差し掛かった頃、第7歌集『風水』が発表されます。もともと1981(昭和56)年刊行の『大西民子全歌集』に収められましたが、1986年に単行本化されました。この歌集で、民子は1982年の第16回 遼空賞を受賞しました。短歌界で業績を残した歌集に贈られるこの賞を受けることは、歌人にとって最も名誉なこととされています。

「襟もとをゆるむるやうにほぐれゆく
花菖蒲見てひと日見飽かぬ」(No.16)



民子所有の花瓶(No.18)



自筆短冊

「道のべの紫苑の花も過ぎむとし
たれの決めたる高さに揃ふ」(No.13)